

## わかちあいプロジェクト NEWS No.2

1993 NOVEMBER

紅茶の産地として有名なスリランカ、ヌワラエリア郊外の村にて



### 「フルに自分を生かそう!!」 わかちあいプロジェクト代表 宝珠山幸郎

脳性マヒで体が動かない重度の障害を持った少年の、「ぼくなら、きつ」という詩を読みました。

「ぼくならきつと、この苦しみに耐えられと神様が見込んで重荷を与えられたのだ。ぼくは、神様にえらばれているのだ。」

この少年がクリスチャンかどうか私には分かりません。しかし、宗教改革者マルチン・ルーテルの手紙の言葉を感じました。

彼は或る時、ひとりの教会員から、「私は、自分の不信仰な姿がどうしてこんなに大きいのか悩みます。」と訴え

られた時、彼はこう答えています。

「主人(神様)が、夫々の召し使いの能力を見込んで、或る人には一タラント、或る人には二タラント、五タラントと預けた。たとえ(マタイ5:14以下)を読んで下さい。神様は管理しきれない重荷や問題や課題をお預けになりません。あなたに大きな不信仰を預けたのはあなたなら必ずそれを乗り切れると見込まれたからです。そのことを思うて、その大きな不信仰を与えられたことに感謝しない。」

自立を援助するこの活動が、自分を過少評価しないでフルに生かす心を起す運動ともなるように!!

### イダルガセナ茶園とダバデニヤ村 松本 傑 事務局長

わかちあいプロジェクトで扱っている有機栽培の紅茶とバスケットについて、どんな人たちが、どんな方法でつくっているのかを知るために8月16日から一週間、スリランカを訪問しました。コロンボから車で約6時間、宝石の産地として有名なラトナプラをへてウバ地方のイダルガセナ茶園につきました。以前は、ニューウッド茶園と契約していましたが、現在は、輸入元のスタッセセンが所有する隣のイダルガセナ茶園が有機栽培農法で生産したものをわたしたちは買っています。

お茶園の労働者は、南インドからやって来たクミールの人たちが大多数で従って98%がヒンズー教徒です。茶園の仕事は、午前7時～午後4時までで、労賃は、72ルピー～最高150ルピー(1ルピーを2、5円で計算すると、180円～375円)が支払われます。お茶は年間を通じて生産されるが、4月～6月の収穫高が最高で、最上のお茶はウバの場合、7月末から9月初めまでの10週間間にできます。有機栽培の場合、年間おとして品質を同じに保つため、プレントしています。堆肥づくり

に人手がかかることと、化学肥料を用いる場合と比べ、収穫高がどうしても少ないことが、割合になる理由です。この茶園で働く300家族の人たちを対象にスタッセセンが資金を提供し、トイレの改善、幼児教育、大工、裁縫の職業訓練などの社会開発のプロジェクトを行なっています。電気がまだ敷設されていないので、電気をはくことも課題になっています。

ダバデニヤ村は、コロンボから北東に車で2時間ほどのところにあります。タラと呼ばれる椰子のような木の若葉を使ってバスケットが作られます。バスケット以外に屋根などに用いられ、村でよく見かける樹木です。実際、バスケット1個につきどれだけ支払われているのかが今回はっきり知ることができました。



歓迎に集まったイダルガセナの子供たちと村人。背景はお茶園



バスケットづくり



彼女は1ヶ月に200個を作った



ホルヘ神父と第一コーヒー高橋三男社長

民族的にはスリランカの人口の74%を占め、仏教を主な宗教とするシンハラの人たちの村です。

タラと呼ばれる椰子のような木の若葉を使ってバスケットが作られます。バスケット以外に屋根などに用いられ、村でよく見かける樹木です。

実際、バスケット1個につきどれだけ支払われているのかが今回はっきり知ることができました。

①ティーバック100個入りの場合、スタッセセンが、33ルピー支払い、作った村人が30ルピー、組合が3ルピー②25個入りの場合、19.7ルピー、17.5ルピー③100グラム入りの場合、13.5ルピー、12ルピー(作った村人の手に入る収入は、①が575円、②が44円、③が30円となります)が替の変動で異なりますが、大体の値段がわかります。普通、一日に4個ほど作るそうです。

お母さんを亡し、一家を支える高校を卒業したばかりの彼女は、1ヶ月に200個をつくり、村の最高記録と言ってもいいました。スリランカの問題は彼女のような優秀な若者に就職の機会がないことです。高校を卒業しても半数以上の人は就職できない状況です。エリートの大卒業者も仕事を見つけないのが大変難しいのです。何が私たちに求められる支援なのか考えさせられる旅でした。

### イスラムの指導者ホルヘ神父来日

カフェマムは、メキシコの先住民民族マヤの人たちの内で、とくに「私はと呼ばれる人たちにより生産されたコー

ヒーです。イスラムはコーヒー生産農家(約500家族)で構成される共同組合です。山岳地のため車が通る道路で、人力とロバにより担がなくてはなりません。世界のコーヒー市場から遠いマムの人たちのために、ホルヘ神父は、コーディネーター(調整役)を引き受けています。発展途上国で草の根の人たちの自立を妨げる原因に、ミドルマン(middle man、金貸し、仲買い業者)の存在があります。貧しい農民の貯の無さに付けこむわけです。メキシコでは彼らは、コーヒーと呼ばれます。彼らの倒産にならないために資金を調達することは、組合の重要な仕事です。また、トランスフェアーのように先進国の良心的な人々たちの協力関係を築くことも大切です。同じイスラムのコーヒーでも、1ポンド(454グラム)を138セント(約146円)で売ると60セント(約64円)で売るとの違いがあるのです。神父は資金調達と市場の開拓の役割を担って7月に来日しました。

### カフェアンデス販売開始

わかちあいプロジェクトのコーヒーの第二弾として、ペルーの北、アンデス山脈のマラニョーン渓谷のコーヒー生産組合(セコアク・ノル)の有機栽培コーヒーを販売していきます。今回は第一コーヒー輸入の協力で、コンテナ1台、17トンに輸入いたしました。



組合長のヒボルト・フエンテス氏

